（2020年1月24日読売新聞 長崎12版25面 地域欄より引用）

（第3種郵便物認可）

医療功労賞 県から2人

長年にわたり地域医療に貢献してきた人をたたえる第48回医療功労賞（読売新聞社主催、厚生労働省、日本テレビ放送網後援、損保ジャパン日本興亜協賛）の都道府県受賞者が決まり、県内からは、県上対馬病院院長の立花一憲さん（65）（対馬市上対馬町）と、国民健康保険平戸市民病院の理学療法士大石典史さん（66）（平戸市宝亀町）が選ばれた。2人の喜びの声を紹介する。

離島の健康 38年間支える

上対馬病院院長・立花一憲さん 65

受賞が決まった立花さん

医療活動歴40年のうち、離島での医療に38年間携わっている。長年にわたって医療、福祉の充実、発展などに貢献していることが評価された。

「地域住民や医療スタッフに支えられて続けてこられた。皆さんのおかげで、感謝したい」と受賞の喜びを語る。

対馬市厳原町出身。長崎北高時代、クラスや学年に医師を目指す同級生が多くいた。彼らに刺激を受け、「古里の人たちの役に立てるなら」と医師を目指すようになった。

県の奨学生として北里大医学部を卒業後、小児科医になって対馬に戻り、厳原病院で勤務を始めた。後期研修後は上五島病院や上対馬病院、対馬いづはら病院に勤務した。

2005年には対馬北部唯一の医療機関・上対馬病院の院長になった。内科も担当し、診療業務だけでなく、月に4、5日ほど当直もこなす。院外活動にも積極的で、乳幼児健診や学校医、在宅診療の実施のほか、「健康寿命」を延ばすよう健診受診を市民に呼びかけ、地域住民の健康管理を下支えしている。

医師や看護師など医療従事者不足の中で、医療機関の機能維持、医療体制の確保、充実にも成果を上げてきた。「今後も生まれ育った対馬で地域医療にかかわっていきたい」との思いを強くしている。

在宅療養する女性に語りかける大石さん

患者に寄り添いリハビリ

国民健康保険平戸市民病院
理学療法士・大石典史さん 66

「誰もが、自分の人生を自分らしく生きられる社会であってほしい」。そんな信念の下、理学療法士として40年以上にわたり県北地域のリハビリ医療充実に心血を注いできた。「大変ありがたいことで、今後の励みにもなる」と受賞を喜ぶ。

平戸市出身。県外の工業大を卒業したものの、〝企業戦士〟への違和感から別の進路を探ろうと養成校に入り直し、3年かけて国家資格を取得した。

国立療養所壱岐病院（現・県壱岐病院）を振り出しに、8年余り離島で勤務した。リハビリテーションという言葉が世間になじみのない時代。1日40～50人を担当することもあったが、懸命に障害と向き合う患者らの姿に「私の方が逆に勇気をもらっていた」と振り返る。

1987年に平戸へ帰郷。当時は市内で1人だったリハビリ専門職として国民健康保険紐差病院（現・平戸市民病院）に入った。「緑寿」を迎えた今なお、通所リハの運営責任者として乳幼児からお年寄りまで幅広い世代の生活、社会復帰を支えている。

「たくさんの縁があって、今がある」。一番に思い浮かぶのは、いつも自身の健康を気遣ってくれ、昨年3月に64歳で旅立った妻の朋子さんだ。「この先も元気で、できる限り多くの人たちの心に寄り添っていきたい。妻も見てくれているはずだから」

企画展は九州で初開催。200円、高校生800円、会館ホールで開かれる。